慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アイロニー発話の「トーン」
Sub Title	Le ton de l'énoncé ironique
Author	西脇, 沙織(Nishiwaki, Saori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2017
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.22, (2017.) ,p.110- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20171201-0110

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アイロニー発話の「トーン」

西脇　沙織

1. はじめに

本稿は西脇 (2016) の続編である。筆者は西脇 (2016) において、「アイロニー発話は発話内容に関わる現象である」ことを論じた。この点が筆者のアイロニー論の主眼であることに変わりはないが、本稿では西脇 (2016) で示唆するにとどめておいた「アイロニー発話において発話事象は本質的な側面ではない」という仮説を「トーン」の分析をすることで本格的に論じる。本稿と西脇 (2016) は補完関係にあり、両者を統合することで「アイロニー発話における本質的な部分は発話内容のみであり、発話事象は付加的なものに過ぎない」という筆者の主張が完結するものと理解していただきたい。

2. 問題

フランス語学においては、一般に発話の意味の中には少なくとも 2 つの要素が存在すると考えられている。発話内容 (contenu) と発話事象 (énonciation) である。発話を構成する語彙の意味に由来する部門は発話内容と呼ばれる。後述するように、発話内容の性質をどのように捉えるかは意味理論によって異なる。これに対して、発話内容の外にあるもの、つまり、発話内容に対する話者の態度、評価、視点、関わり方を発話事象と呼ぶ。発話内容は発話において言われていること (le dit) であり、発話事象は発話の言いかた (le dire) であるとも言われる。以下、この区別を踏襲することにする。

本稿のテーマであるアイロニー発話の意味の中にも発話内容と発話事象の 2 部門が存在する。アイロニーとは、Larousse によると、

(1) Manière de railler, de se moquer en ne donnant pas aux mots leur valeur réelle ou complète, ou en faisant entendre le contraire de ce que l'on dit.

と定義される現象である[1]。辞書の定義にも表れているように、アイロニーとは反対のことや不完全なことを述べるというどこか奇妙なものの言い方、奇妙な話し方であるという考えが日常的に受け入れられている。

フランス語学においても、アイロニーは発話事象の奇妙さによって特徴付けられる発話事象的現象であるという考えが根強く、アイロニーの発話事象の性質をどう記述するのが最良であるかということが議論の最大の争点になっている。中でも最も重要な研究は、Sperber & Wilson (1978) と Ducrot (2010) だろう。Sperber & Wilson (1978) に従うと、アイロニー発話の話者は誰かの発話をエコーのように繰り返しながら、その内容に対する乖離的な心的態度を表現するとされる。Ducrot (2010) によれば、アイロニー発話の話者はアイロニー発話の内容を自ら構想するが、その内容を後続の言説の中で展開することを禁じるとされる。これらの説明をよく観察すると、2 つの要素によって、アイロニー発話の発話事象が特徴付けられていることがわかる。1 つ目の要素は、「態度」である。すなわち、話者が発話内容に対して距離を取るか取らないかという点である。この点に関しては、Sperber & Wilson (1978) も Ducrot (2010) も距離を取る (distanciation énonciative, non soutien énonciatif, non prise en charge) という見解で一致している。2 つ目の要素は、「トーン」である。つまり、発話内の発話内容がどのようにあるいは誰によって言われているのか、という問題である。この点に関しては、Sperber & Wilson (1978) と Ducrot (2010) の見解が異なっている。Sperber & Wilson (1978) は、アイロニーにおける発話内容はエコーされる他者の思考を表示している、つまりアイロニー話者は自分以外の誰かに話をさせているのだとしている。それに対して、Ducrot (2010) は、アイロニーにおける発話内容は話者自身が発話時点において作り出したものとしてディスコース上に提

[1] http://www.larousse.fr/dictionnaires/francais/ironie/44252（最終アクセス 2017 年 9 月 27 日）

示される、つまりアイロニー話者は自分自身で話をしているのだとしている。つまるところ、Sperber & Wilson (1978) に従えば、話者が自分の賛同していない誰かに話をさせるからアイロニーは奇妙な話し方なのだということになり、Ducrot (2010) に従えば話者が自分は賛同しない内容を自分が構築した内容であるかのように話すからアイロニーは奇妙な話し方なのだということになる。

これに対して、筆者は西脇 (2016) において、Carel (2011) の意味論的ブロック理論を援用し、アイロニー発話はそもそも発話事象的現象ではなく、発話内容的現象であることを主張した。意味論的ブロック理論では、発話において言われていることを donc あるいは pourtant を含む論証的シークエンスにパラフレーズし、それに発話において中心となる語の規約的意味によって表現される論証的スキーマを添えることで発話内容を記述する。通常、シークエンスはスキーマの具体化であり、スキーマはシークエンスの抽象化である。西脇 (2016) では、アイロニー発話においてはシークエンスとスキーマの間に正常な抽象化、具体化の関係が成り立っておらず、このシークエンスとスキーマの間のギャップがアイロニー発話を生じさせると論じた。また、これをもとに、アイロニー発話の話者の発話内容に対する「態度」について、先行研究が考えるように常にアイロニー発話の話者は発話内容に対して常に距離を取るわけではなく、発話内容における論証的ギャップが矛盾にまで達していれば不支持的態度を取るが、このギャップが強弱に関するものにとどまるのであれば支持的態度を取ることもあると述べた。そして、アイロニー発話を成立させるのは論証的ギャップであり、「態度」は発話内容の性質の帰結に過ぎないとした。序文で述べたように、西脇 (2016) の続編に位置付けられる本編では、西脇 (2016) で扱わなかった、発話事象を記述するためのもう 1 つの要素である「トーン」について詳しく扱う。西脇 (2016) と本稿を連続した論考として読むことで、発話事象を構成する 2 つの要素のうち「態度」のみならず「トーン」もアイロニー発話の成立には関与せず、アイロニー発話は発話内容の性質すなわち発話内容内部の論証的ギャップのみにより成立するという筆者の主張が完結するようになっている。

なお、フランス語学に限らず、言語学全体を見た場合、アイロニー研究においては、関連性理論のアプローチと新グライス派のアプローチの対立が顕著であり、それに対して本稿の立場がどのように異なるのかと疑問に思われるかもしれない。関連性理論は先に述べたようにアイロニー発話は否定的感情とともに誰かの発話をエコーすると説明する。新グライス派は、会話の原理の違反としてアイロニーを説明する。本稿のアプローチは、後述するように、発話内容の性質を世界の状態と結び付けないという点で関連性理論とも新グライス派とも決定的に異なる。

3. 理論的枠組み：論証的ポリフォニー理論

アイロニー発話のトーンを分析するための道具立てとして、本稿では Carel (2011) の論証的ポリフォニー理論を使うこととする。論証的ポリフォニー理論は、発話の意味のうち、発話事象について扱う理論である。「論証的」という言葉は、論証的ポリフォニー理論とペアになり、発話内容を担当する理論である Carel (2011) の意味論的ブロック理論の考えから来ている。西脇 (2016) で見たように、意味論的ブロック理論では、発話内容を世界の状態ではなく、語を donc, pourtant などの接続詞と組み合わせて作る論証のシークエンスと論証スキーマの複合体であると考える。「ポリフォニー」という言葉は、Ducrot (1984) のポリフォニー理論から来ている。

論証的ポリフォニー理論はその名前の示す通り Ducrot (1984) のポリフォニー理論を発展させたものである。しかし、発話の中に複数の発話内容が存在するという初期のポリフォニー理論のアイディアを引き継ぎながらも、 énoncer un contenu, c’est l’utiliser という言葉に代表されるように、発話事象とは発話内容をディスコースの中で使用することであるという考えに基づいて独自の発展を遂げている。具体的には、発話内容に談話機能 (fonction textuelle) と出現様式 (mode d’apparition) をそれぞれ 1 つずつ割り振ることによって、発話事象は記述される。談話機能はいわゆる話者の発話内容に対する「態度」を記述するためのパラメーターであり、出現様式はいわゆる発話内容の言われ方、つまり、「トーン」を記述するためのパラメー

ターである。話者の発話内容に対する「態度」を記述する談話機能については西脇 (2016) ですでに扱ったので、本稿ではアイロニー発話における「トーン」に関わる出現様式のみにポイントを絞って論述を進めて行く。

論証的ポリフォニー理論の枠組みでは、発話内容のトーンは構案モード (mode du conçu)、受容モード (mode du reçu)、発見モード (mode du trouvé) という 3 種類の出現様式として捉えられる。それぞれのモードは話者の発話内容への関わり方 (s'investir, s'impliquer) の強さによって区別され、全ての発話内容がこの 3 つの出現様式のうちいずれか 1 つの出現様式を持つとされる。以下、それぞれの出現様式について見ていく。

3.1. 構案モード

構案された発話内容は、発話をする瞬間に話者自身が考え出したものとしてディスコース上に提示される内容である。噛み砕いていうと、話者が自分で感じたこと、言っていることとして提示している発話内容ということになる。構案モードは 3 種類のモードの中で、話者が内容に対して、最も強く関わる (le plus investi) モードであるとされる。このモードの主観性の源泉が話者にあると考えるからである。また、ある種の表現はそれに関わる内容を構案モードとして示すとされる[2]。例えば、bien の情意的用法や je trouve (que), il semble (que), je vois (que) などである[3]。

(2) Il avait bien souffert.
(3) Je trouve ce film intéressant.
(4) Il semble que Pierre est là.

---

[2] 主観性の源泉が常に話者に求められるという意味において、これらのマーカーは常にある内容に構案モードを付与する。これらのマーカーは、内容を事実ではなく、話者自身の個人的考えとして示されていることを知らせるもので、後述する発見モードとは異なる。

[3] 2 節で紹介する (2)-(11) は全てオリジナルの例である。

これらのマーカーは話者が内容を発話時点で構築したことを示すものであり、(2) の彼が苦しんだという内容、(3) の映画が面白いという内容、(4) のピエールがいるという内容は、それぞれアプリオリにはどのモードもとりうるが、ここでは構案モードを示すマーカーである表現とともに用いられているため、話者が内容に対して強く関わり、発話時点において構築された内容としてディスコース上に提示されることになる。なお、冒頭で Ducrot (2010) の説では「アイロニーの話者は自分自身で発話内容を構築する」のだと紹介したが 、この研究は論証的ポリフォニー理論に基づいており、専門用語では「アイロニーの発話内容は必ず構案モードを取る」と述べられている。

3.2. 受容モード

考案モードは話者の関わりが強い発話内容であるのに対し、受容モードは話者の関わりが弱い発話内容であるとされる。受容モードの発話内容においては、話者の主観性が誰か他の人物の主観性に取って代わられると考えられるからである。噛み砕いていうと、受容された発話内容は、誰かが言ったことを受け取って述べているものだと言える。また、X dit que, on dit que, il paraît que などは、ある内容が受容モードを示す言語的マーカーであるとされている[4]。

(5) Jean dit qu'il n'aime pas Marie.
(6) On dit que le temps change les choses.
(7) Il paraît que Pierre est là.

(5) のジャンはマリーが好きではないという内容、(6) の時の流れとともに物事は移り変わるという内容、(7) のピエールがいるという内容、それぞれ

[4] 論証的ポリフォニー理論においては、dire の意味のうち、emploi attributif と emploi modal を区別するが、ここでのマーカーの議論に関わるのは emploi modal である。伝聞形式の On (m'a) dit que と il paraît que の違いについては Carel (2011) の 8 章 3.1.2.を参照。

アプリオリにはどのモードを取ることも可能である。しかし、ここでは、話者の主観性ではなく他者の主観性を表すマーカーとともに用いられているため、(5)-(7) の発話内容は受容モードになり、話者が誰かから受け取った内容としてディスコース上に提示される。なお、この誰かが誰なのかということは問題にしない。なぜなら、Jean dit que のように誰が言ったのかが発話上に明示される場合もあるが、il paraît que のように特定の人物と結び付けられない場合もあるからである。ある発話内容が誰によってどのように言われたかというトーンを問題にするときに、論証的ポリフォニー理論において「モード」や「出現様式」といった擬人化を排除した表現を使うのも同様の理由からである。

3.3. 発見モード

発見された発話内容も、話者の関わりが弱い発話内容である。受容モードでは、話者が自分以外の主観性に取って代わられるために話者の関わりが弱まるのに対し、発見モードでは話者が物事に取って代わられるため、話者の関わりが弱まると言われる。発見モードの発話内容の主観性の源泉は話者でもなく話者以外の誰かでもなく、そこで語られている出来事そのものであるかのようである。この意味で、発見モードは Benveniste (1959) のいう énonciation historique に近いとされる。噛み砕いて言うと、発見モードにおいては、話者はすでに世界に存在していることをそのまま述べているのだとされる。例えば、タバコの箱に書かれている次の文言のように、である。

(8) Fumer provoque le cancer.

また、ある内容が発見モードであることを示す言語的マーカーの典型例は単純過去の使用であるとされている。montrer 及び prendre の単純過去形を含む次の例の内容は発見モードで語られていることになる。

(9) Le chevalier monta sur son cheval et prit sa lance.

さらに、発見モードにはあることを独断的に決めつけ、反駁不可能なものとして提示するという特徴もある。これは、ある内容をすでに世界に存在し、認められている事実であるかのように内容を示すことで、出来事そのものが物語っているかのようなトーンを付与する現象である。下の例では特にその例が顕著で、狩猟が悪であるという内容を話者が主観的に構築したものでなく、反論の余地のない事実として提示されている[5]。

(10) La chasse, c'est déguelasse.

また、c'est comme ça という表現はある内容が発見モードであることを示す言語的マーカーである。

(11) Je suis moche et c'est comme ça.

ここでは、c'est comme ça を付け加えることよって、je suis moche という内容を自身の主観的な意見ではなく、反駁不能な事実として提示している。

一般に、フランス語学においては、発話内容が評価的 (évaluatif) であれば、話者はその発話内容に対して強く関わり、発話内容が記述的 (descriptif) であれば、話者はその発話内容に対して関わらない、あるいは強く関わらないと考えられている[6]。論証的ポリフォニー理論（とそれとペアになる意味論的ブロック理論）の最大のオリジナリティは、全ての発話内容が評価的であり、その発話内容が話者自身の構築物として提示されることも、他者から受容したものとして提示されることも、すでに存在している事実として提示されることもある、ということである。なぜなら、すべての発話内容は、どれだけ記述的に見える内容であろうと、評価的に見える内容であろうと、

[5] 内容を自分自身の主観的な考えでなく、客観的事実を述べているかのように示すという限りにおいて、話者の関わりは弱いとされる。この意味で、この現象は先に述べた構案モードとは大きく異なる。

[6] このような考えは例えば Bally (1965) に見られる。

donc と pourtant という話者の判断を含む論証的内容に書き換えられると考えるからである。慎重 (prudent) という一般に主観的に思われる語 が danger donc précaution 書き換えられるように、ナイフ (couteau) という一般に主観的ではないと思われる語も dur pourtant couper に書き換えられる[7]。発話内容に déguelasse や moche などの真偽判定ができない語を含むか含まないかということは内容の提示の仕方とは無関係である。真偽判定ができないので、一般に話者の価値判断を伴うと考えられている déguelasse や moche などの語を含む内容を真実であるかのように発見モードで言うこともできるし、Pierre est là のような真偽判定可能な内容を主観的な構案モードで言うこともできるのである。

4. アイロニー発話の出現様式

論証的ポリフォニー理論の出現様式について簡単に説明したところで、早速、この概念を使って、アイロニー発話の内容がどのようなトーンで言われるか見ていくことにする。先行研究の考えとは反対に、アイロニー発話の発話内容は特定のトーンで言われるのではなく、様々なトーンで言われることが可能である。

4.1. 構案モード

まずは、構案モードが付与されるアイロニー発話の発話内容について見ていくことにする。次の例は 2012 年度のフランス大統領選挙について書かれている新聞記事である。2012 年度の選挙では、ニコラ・サルコジとフランソワ・オランドが有力候補であった。最終的にはオランドが当選したが、選挙戦の期間中から、すでに、サルコジが劣勢でオランドが優勢であることが伝えられていた。そのような状況の中で、オランドが憲法の序文の中に含まれている、人種 race という語を削除することによって、人種差別をなくそう、という公約をした。これに対して、サルコジは有権者の気になる問題は race という語を憲法から消すか消さないかということではなく、失業問題等

[7] 文脈によってはそれ以外のパラフレーズも可能。

であると考え、オランドの公約が見当違いなものであると批判しているアイロニーを発したことを記事が伝えている[8]。

(12) Détendu, plaisantant, M. Sarkozy démarre sa visite en Seine-et-Marne, vendredi matin, par une déambulation dans les quartiers réhabilités de Meaux. C'est l'occasion, pour lui, de vanter son bilan et le "plan le plus gigantesque jamais entrepris dans une démocratie" en faveur des quartiers. Mais ce qui l'intéresse, c'est surtout d'éreinter Hollande. [...] A la tribune, deux heures plus tard, M. Sarkozy continue ses attaques dans un discours en grande partie improvisé. Il s'en prend, notamment, à la proposition de son adversaire d'enlever le mot "race" du préambule de la Constitution. ''Je vois que j'ai un concurrent qui a vraiment compris quelles questions se posent les Français !'', ironise-t-il [...]. (*Le Monde*, 03-18-2012)

je vois que という構案モードを示すマーカーの存在からもわかるように、下線部のアイロニーの発話の内容は話者がその構築に強く関わり、発話の時点で構想された構案モードの内容であることがわかる[9]。

次の例も構案モードの内容を持つアイロニー発話である。同じく 2012 年のフランス大統領選挙戦の期間に、ヨーロッパの各国の中道右派よりの首脳がサルコジを支援し、オランドとの面会を拒否するということがあった。そのような状況の中で、それがサルコジの陰謀なのではないかという噂があった。それに対してオランドが言ったアイロニーを次の記事が報告している。サルコジを支持する他国の首脳の行動について、感動するような友情と団結である、と大げさに褒めているのがアイロニーのポイントである[10]。

---

[8] 下線部筆者。以下の例文も同様。

[9] サルコジのアイロニーでは pas du tout compris と言うべきところを vraiment compris と言っているところがポイントになるが、n'a pas compris と言うべきところを compris と言ったとしても依然としてアイロニーは成立する。

[10] 下線部のあとをジャーナリストによるオランドへのアイロニーと捉えることも可能である。その場合、出来事が淡々と三人称で述べられていることから、ジャーナリストは発見モードのアイロニーを用いていると考えられる。

(13) Encore une porte close, ou presque. Pays après pays, François Hollande continue à essuyer les refus des dirigeants conservateurs de le recevoir. Il y avait eu l'Italie, l'Allemagne et la Grande-Bretagne. Vendredi, c'est en Pologne que le candidat socialiste n'a pu rencontrer le premier ministre de centre droit, même s'il a pu voir le président de la République récemment élu, Bronislaw Komorowski. [...] « Je comprends la prudence. Je vois les amitiés et plus particulièrement leur devoir de solidarité. Celui qui s'exerce à l'égard du président sortant [M. Sarkozy] me touche tout particulièrement », ironise-t-il, en oubliant un moment qu'il venait d'expliquer quelques minutes auparavant, qu'il ne parlerait pas de politique intérieure à l'étranger. (*Le Figaro*, 10-03-2012)

ここでも je vois que という構案モードを示すマーカーとともにアイロニーが述べられており、アイロニー発話の内容が構案された内容であることがわかる。

4.2. 受容モード

しかし、すべてのアイロニー発話の内容が構案モードであるとも限らない。先ほど、il paraît que は受容された内容を示すマーカーであると述べたが、アイロニー発話の発話内容は il paraît que によって導入されることも可能である。次の例は、2016 年のフランス大統領選挙中に報じられた、フランソワ・フィヨンのスキャンダルについて述べた新聞記事である。フィヨンはそのスキャンダルがでっち上げであるということを il paraît que を用いたアイロニーによって伝えている。

(14) À quelques jours maintenant du premier tour de l'élection présidentielle, le candidat des Républicains libère plus que jamais sa parole. Objectif ? Répondre à l'outrance par l'outrance. Qui aurait cru que François Fillon allait être amené un jour à s'exprimer sur de prétendues relations avec des escort boys. Lui aussi à l'aise par le passé qu'engoncé désormais dans son costume d'ancien favori à la présidentielle, serait en effet – comme l'explique nos confrères de Paris Match

dans leur édition du jour – actuellement en proie à ces bruissements de couloir…et plus encore même. « Il paraît que j'ai des appartements dans Paris, des voitures de collection, des maîtresses un peu partout et même des escort boys », aurait-il ainsi ironisé auprès d'amis dans le Var. Dans le tumulte depuis le 25 janvier dernier (date des révélations du Canard Enchaîné sur le supposé emploi fictif de son épouse Penelope), François Fillon, on le sait, a vu les domi-nos de sa renommé tomber l'un après l'autre. D'abord fragilisé, il semblerait, à présent, désireux de vouloir grossir le trait de ces attaques dans le but d'épais-sir un peu plus sa défense, à savoir : ces outrances sont le résultat d'un complot à son encontre ; plus c'est gros, moins c'est vrai ! (*Gala,* 06-04-2017)

il paraît que という受容モードのマーカーによって導入されている、フィヨンのアイロニー発話の内容は受容された内容であるということになる。ここでは話者本人ではなく話者以外の誰かが話している。partout が主観を示しているので構案モードではないかと思われるかもしれないが、前述のように、論証的ポリフォニー理論においては、beau や déguelasse のような一般に話者の判断が介入していると考えられている語が含まれている内容が構案モードになるとは限らない、Pierre est là のような目で観察できる客観的な内容が必ず構案モードになるとは限らない、ということがポイントである。あくまでも、その内容が「どのようなトーンで言われたのか」ということがポイントである。

次も受容モードのアイロニーの例である。政治家のベルナール・カズヌーヴが同じく政治家のティエリ・ブライヤールに服装をからかわれたことに対して、il paraît que を含むアイロニーを使って言い返している。

(15) Bernard Cazeneuve ironise sur son look de "notaire de province" moqué par Thierry Braillard #NEVERFORGET - Auditionné ce mercredi 21 janvier à l'Assemblée nationale par la commission d'enquête sur la surveillance des filières et des individus djihadistes, le ministre de l'Intérieur a montré qu'il avait une bonne mémoire et confirmé son humour pince-sans-rire. Ainsi au détour d'une analyse sur la difficulté à identifier et suivre les "acteurs mouvants" des filières

djihadistes, il estime qu'il "faut regarder les cas concrets et en tirer les conséquences de manière extrêmement méticuleuse et minutieuse en essayant d'avoir une analyse presque notariale sur ces sujets". Il ajoute : *Ce qui n'a pas été un rôle de composition pour moi puisque il paraît que je suis un notaire de province* (sic). Il précise qu'il n'a "pas eu de difficulté à faire un examen notarial de cette réalité", avant de poursuivre sans ciller sur les interceptions de sécurité concernant les frères Kouachi. Cette allusion au "notaire de province" est un petit retour à l'envoyeur, plus précisément son collègue du gouvernement Thierry Braillard, secrétaire d'État chargé des Sports. Interrogé par le *JDD* le 28 décembre dernier, ce dernier déclarait : *Le premier à m'accueillir quand j'ai adhéré au PRG, c'était Bernard Cazeneuve. Il était déjà le même qu'aujourd'hui, en costume trois pièces avec un look un peu notaire de province.* Bernard Cazeneuve, visiblement, n'a pas oublié cette petite phrase. (*Europe1*, 22-01-2015)

ここでもアイロニー発話の内容が受容モードのマーカーil paraît que で導入されており、内容が他者のトーンで語られていることがわかる。

4.3. 発見モード

さらに、アイロニー発話の内容は構案モードと受容モードだけでなく、ある物事を客観的な事実であるかのように述べる発見モードで述べられることもある。

次の例を見てみよう。これは、2012 年度の大統領選挙に関する新聞記事である。前述のように、落選前からサルコジの劣勢は伝えられていたが、一時期ニコラ・サルコジが支持率調査においてオランドを少しだけ追い上げてきた、ということがあった。そのような状況の中で、オランドがサルコジについて、Parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu.とコメントしたことを新聞記者は伝えている。支持率調査の結果を見てサルコジが悲しんではいないという状況を、大喜びしている状況として提示する大袈裟な内容を発話しているというアイロニーである。

(16) Le problème est moins de convaincre que d'être entendu. Dans les quartiers populaires, où il se déplace pendant quarante-huit heures, François Hollande multiplie les appels à la mobilisation. Il veut lutter contre l'abstention, qui, dans les banlieues, pénaliserait d'abord la gauche. [...] Dans les enquêtes d'opinion, les intentions de vote continuent de fléchir lentement pour Hollande. Il ironise sur ces rebonds du président-candidat : « Parfois, il reprend confiance parce qu'à la lecture de certaines enquêtes, il serait battu moins nettement que prévu. » Puis il s'en sert pour remobiliser son camp : « Quand je le vois plastronner, je me dis : "Battons-nous. Rien n'est acquis". » L'assistance, face à lui dans le parc, est clairsemée, mais Hollande ne s'inquiète pas : il mise beaucoup sur les microréunions. (*Le Figaro*, 07-04-2012)

オランドのアイロニーの内容は je でなく il で書かれていること、客観的な出来事、事実そのものとしてサルコジのリアクションを提示していることから、発見モードであると考えられる。je vois que で導入されている (12) や (13) のアイロニーと比べると、(16) のアイロニーの持つ客観的に淡々と物事を述べている性質がより一層顕著である。

単純過去形は発見モードを示す言語的マーカーであることはすでに述べたが、次のヴォルテールのカンディードにおけるアイロニーのように、アイロニー発話の内容が単純過去形で述べられることもある。ヴォルテールのアイロニーには文学的な深い意味を持つが、ここでは文学作品のテクスト分析をするという目的ではなく、あくまでもアイロニーが発見モードのマーカーである単純過去形とも共存できることの例として示す。1759 年にヴォルテールのカンディードは出版された。全編に渡って、カンディードという人物を通して、哲学者の楽観主義を批判している。次の断片は 3 章の冒頭で、カンディードがブルガリアとアヴァールの戦争の第一線に居合わせた場面である。

(17) Rien n'était si beau, si leste, si brillant, si bien ordonné que les deux armées. Les trompettes, les fifres, les hautbois, les tambours, les canons, formaient une harmonie telle qu'il n'y en eut jamais en enfer. Les canons renversèrent d'abord à

peu près six mille hommes de chaque côté ; ensuite la mousqueterie ôta du meilleur des mondes environ neuf à dix mille coquins qui en infectaient la surface. La baïonnette fut aussi la raison suffisante de la mort de quelques milliers d'hommes. Le tout pouvait bien se monter à une trentaine de mille âmes. Candide, qui tremblait comme un philosophe, se cacha du mieux qu'il put pendant cette boucherie héroïque. (Voltaire, *Candide*)

一般に前半部分は戦争を美しいもの、あるいは戦術ゲームのように捉える当時の哲学者の考えを模して描写がされている。下線部は、戦場から離れたところで綺麗事を言っているが、実際に戦争を見てみたら怖がって身を隠している哲学者をからかっているアイロニーである。発話の主節に現れる動詞 se cacher の単純過去形 se cacha は発見モードのマーカーであることから、このアイロニー発話の内容は発見モードであるということになる。

観察をまとめると、アイロニー発話の発話内容の出現様式は、構案モード、受容モード、発見モードの 3 種類全てを取ることが可能であることがわかる。つまり、アイロニー発話の発話内容は Ducrot (2010) の見解とは異なり、必ずしも話者のトーンで言われるとは限らない。Sperber & Wilson (1978) のいうように、必ずしも話者以外の誰かのトーンで言われるとも限らない。アイロニー発話の発話内容は特定のトーンではなく、様々なトーンで言われることが可能である。

5. 結論

先に述べたように、Carel (2011) の意味論的ポリフォニー理論と論証的ブロック理論の枠組みでは、発話内容とは発話の論証的シークエンスと論証的スキーマの複合体であり、発話事象とは談話機能 (いわゆる「態度」に相当する) と出現様式 (いわゆる「トーン」に相当する) である。

これまで見てきたように、アイロニー発話の発話内容に付与される出現様式は様々であることから、トーンはアイロニー発話の成立には直接関係しない要素であると考えられる。もう 1 つのパラメーターである話者の発話内容に対する「態度」だが、西脇 (2016) で述べたように、これも常に一定であ

るとは限らない。このことから、アイロニー発話を発話事象つまり談話機能と出現様式の性質によって特徴づけるのは困難だと考えられる。もちろん、アイロニー発話の意味の中にも発話事象的意味は存在し何らかの役割を果たしているが、そのことはアイロニー成立の直接の原因とはならない。

これらの観察が正しければ、アイロニー成立に発話事象（つまり談話機能と出現様式）は介入しないため、アイロニーは発話内容（つまり論証的シークエンスとスキーマの複合体）の性質のみにより生じることになる。アイロニー発話は論証的内容の性質、すなわちシークエンスとスキーマの間のギャップにより成立することは西脇 (2016) で述べた。本稿の考察を踏まえると、この考えをさらに推し進めることが可能である。すなわち、アイロニー発話はこの論証的ギャップ「のみ」によって成立すると考えられる。

発話事象すなわち談話機能及び出現様式がアイロニーの成立の直接の原因ではない以上、アイロニーは発話内容つまり論証的スキーマとシークエンスの性質によってのみ成立する発話内容的現象であるということになる。冒頭で述べたように、フランス語学の分野では、アイロニー＝発話事象的現象という図式が定着しているが、そのような扱いを問い直す必要性、アイロニー＝発話内容的現象として捉え直す必要性が出てきたのである。

引用文献

Bally, C. (1965) *Linguistique générale et linguistique française*, Berne, Francke.

Benveniste, E. (1959), *Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard.

Carel, M. (2011), *L'Entrelacement argumentatif*, Paris, Honoré champion.

Ducrot, O. (1984), *Le dire et le dit*, Paris, Minuit.

Ducrot, O. (2010), "Ironie et négation", V. ATAYAN, U. WIENEN (eds), *Ironie et un peu plus. Hommage à Oswald Ducrot pour son 80ème anniversaire*, Frankfurt am Main, Peter Lang, 169-181.

Nishiwaki, S. (2015), "Analise argumentativa da ironia standard et da ironia nao-standard" *Letras de Hoje* 50-3, 287-293.

Nishiwaki, S. (2016a), "Analyse argumentative de l'ironie standard et de l'ironie

non-standard” *Bulletin d’Études de Linguistique Française* 50-2, 103-118.
Nishiwaki, S. (2016b), *Ironie et argumentation*, Thèse de Doctorat, EHESS Paris.
Nishiwaki, S. (manuscrit), *Phénomène propositionnel et phénomène énonciatif. Le cas de l’ironie.*
Sperber, D. & D. Wilson (1978), “Les ironies comme mentions” *Poétique* 36, 399-412.
西脇沙織 (2015) 「反語法を用いたアイロニーと誇張法を用いたアイロニー：意味論的ブロック理論による説明」川口順二編『フランス語学の最前線 3』 ひつじ書房, 305-327.
西脇沙織 (2016) 「アイロニー発話の意味の性質」『慶應義塾大学仏文学研究室紀要』21, 33-49.